



東日本大震災・女性支援ネットワーク  
*Rise Together for Women in East Japan Disaster*

# 女性と多様なニーズに配慮した 災害支援アイデア集の紹介

研修チーム  
文京学院大学 教員  
田中雅子

なぜ、ニーズに対応した  
より良い支援が難しかったのか？

「言ってくれれば良かった」、「気づかなかった」  
「専門の職員がいない」

「女性支援は女性団体にしかできない」  
「障害者支援は障害者団体しかできない」  
という思い込み。

専門の団体だけが対応すれば  
良いのでしょうか？



Rise Together

東日本大震災女性支援ネットワーク

# 災害時の地域の現実

すべての地域に  
専門の団体があ  
るとは限らない

専門の団体が災害という  
非日常の中で通常通り  
機能するとは限らない

行政、地元団体、支援団体、ボランティア  
誰もが多様性に配慮した支援が  
できるようにしておくことが大切です！！



# 災害支援アイデア集とは？

## 目的

専門性をもたない人でも、  
ある程度の配慮をすれば、  
被災した人たちひとりひとりを大切にし、  
支援者やボランティア自身も  
気持ちよく活動することができるような  
支援のヒントを提供すること



東日本大震災女性支援ネットワーク

Rise Together

# 特徴

時期と対象による分類で、  
現場で活動する人が、  
手にとってすぐ活用できるもの

<時期>

発災直後/避難期/仮設住宅/  
復興期/常に気をつけること

<対象>

行政/地元団体/支援団体/  
ボランティア個人

## 目次

タイトル	時期 (※)	対象	ページ
01 女性職員だから聞けたニーズ	A B	行政・支援団体	4
02 女性支援センターの設置	E	行政・地元団体	5
03 男性の滞在ニーズにこたえる	C D	地元団体・支援団体	
04 参加できない人の声	E	地元団体・支援団体	6
05 調整会議の重要性	E	支援団体	7
06 男女混成チームでの支援活動	E	支援団体	
07 ハラスメントに関する研修	E	支援団体	8
08 援助効率か多様性配慮か	E	支援団体	
09 在宅避難者へのケア	E	地元団体・支援団体	9
10 多様なニーズに合わせた物資の配布	B	地元団体・支援団体	
11 物資配布時の工夫	B	地元団体・支援団体	10
12 お母さんの手をあける	B C	地元団体・支援団体	11
13 避難所でのローテーションで個人の時間を作る	A B	地元団体・支援団体	
14 支援が手薄になりがちな在宅被災者	A B	地元団体・支援団体	12
15 障害児と家族の避難の現実	A B	行政・地元団体・支援団体	
16 セクハラ対応	E	支援団体	13
17 職員・ボランティアの行動規範を定める	E	支援団体	
18 職員宿舎の配慮	E	支援団体	14
19 事業形成は二人三脚で	D	支援団体	
20 仮設住宅支援に女性職員を	C	行政・地元団体・支援団体	15
21 復興まちづくりへの子どもの参加	D	行政・地元団体・支援団体	
22 芽でるカー	C D	行政・地元団体・支援団体	16
23 託老・託児支援	E	行政・地元団体・支援団体	17
24 見送されがちな高校生への支援	B C	地元団体・支援団体	
25 避難所生活を快適に	B	地元団体・支援団体	18
26 選択肢を増やす	B	支援団体	19
27 選材選所への配慮	E	支援団体	
28 個人情報の共有や写真撮影に注意	E	支援団体	
29 活動終了後の支援者ケア	E	支援団体	20
30 被災者との関係の難しさ	E	支援団体	21
31 避難所運営にかかわったフィリピン女性	B		
32 女性の声を聞く工夫	A B	行政・地元団体	22
33 女性リーダーが声をまとめる	B	行政・地元団体	
34 長期的な支援が必要な被災者の追跡調査	C D	行政・地元団体・支援団体	23
35 災害時に出勤義務のある人々の備え	A B	行政	
36 引継ぎが大事	E	行政	
37 相談業務のフロウの改善	E	行政・支援団体	
38 母親たちのつながりの場となった PTA	E	行政・地元団体	
39 多様なニーズをいかに把握するか	B	支援団体	
40 地域ごと避難所から仮設へ			
41 つながる場の必要性	E	行政・地元団体・支援団体	
42 避難所での障害をもつ人に対する対応のヒント集	A B	行政・地元団体・支援団体	
43 帰宅困難に陥った女性への場所提供	A	行政・地元団体	
44 ピアなど女性ニーズ/ 思春期の少女向けメッセージ	A B	行政・地元団体・支援団体	
45 女性専用スペース	B	行政・地元団体・支援団体	
46 避難中の方に休息を			
47 自治会副会長となった若妻会リーダー			

(※) 時期/A: 発災直後 B: 避難期 C: 仮設住宅 D: 復興期 E: 恒常的

# 事例の一部より

## A. 発災直後／B.避難期

女性職員だから聞いたニーズ／避難者に休息を／障害児と家族の避難の現実／

## C. 仮設住宅

男性の潜在ニーズに応える／支援員に女性を

## D. 復興期

まちづくりへの子どもへの参加／事業形成は二人三脚で

## E.常に気をつけること(スタッフケアなど)

職員宿舎の配慮／行動規範を定める



# ■ 発災直後の例

対象：支援団体

トピック：女性のニーズを把握する仕組みづくり

避難所では、困り事や要望をなかなか口にできません。宮城県A市の女性団体と市の男女共同参画担当職員は、事前に避難所リーダーの区長さんに説明した上で、別室に女性だけ集まってもらって説明しました。女性たちは最初、あまり語りませんが、誰かが口火を切ると、滝のように悩みがあふれてきました。「ほしい下着や日用品、困り事など」にチェック(✓)する簡潔なリクエスト票に記入してもらい、個々人に応じた支援ができました。不足物資や困り事を集計して市長に届けたところ、市長は女性避難者の状況を知って驚き、女性団体を後援することになり、倉庫を借りたり寄付を募りやすくなりました。



# ■避難期の例

## トピック:被災者に休息を

避難所では一部の女性たちだけが炊き出しを担うことも多く、長期にわたることで疲弊する例も出ます。津波の被害を受けた宮城県石巻市雄勝町の、ある学校にできた避難所では、女性住民による防災組織のリーダーが住民によびかけて女性を中心に毎日炊き出しを行いました。その際、体を休めたり、自宅の様子を見に行ったりすることができるようにローテーションを組んだ結果、炊き出しの負担は3日に1度で済むようになりました。

### ●固定的性別役割分担の改善

災害直後は固定的性別役割の発生がやむを得ないような状況であったとしても、体制を工夫してみんなの負担を減らしたり、若者や子ども、男性も、徐々に手伝える状況を増やしていく、ボランティアの力を生かす、といったことが大切です。





# ■避難期の例

## トピック:障がい児を抱えた家族の避難の実態

乳児や障がい児を抱えた家族が、周囲への気遣いで避難所にいづらくなり、ガス・水道・電気も復旧しておらず食料・物資の支援などもない自宅へ戻るケースが見られました。被害の少なかった個人宅に障がい児を抱えた複数の家族が身を寄せ合って暮らしているケースも見られましたが、そこにも外部からの支援はありませんでした。

### ●具体的な対策の方法

大規模避難所は、衛生面やプライバシーの問題が大きく、こうした避難の在り方は、災害時の一つの選択としてたいへん有効ですが、なかなか支援対象とはなりません。災害時要援護者を意識した在宅避難者に対する公的な支援の仕組みを、行政の防災計画に組み込み、災害ボランティアや地域組織との連携のもとで、支援が行えるようにしていくことが大切。



# ■復興期の例

対象：支援団体

トピック：支援の対象として見えにくくなる人々の追跡把握

ある支援団体は、在宅避難世帯への定期的な物資配達を6月末に終了しました。しかし一人暮らしの高齢女性やシングルマザーは、仮設に入れば得られる情報も、得られにくい状態でした。そこで、7月以降も在宅の高齢女性やシングルマザーを定期的に訪問しました。また、避難所に最後まで残った人々は避難所閉鎖後の生活に困難が多いことが予想されたため、避難所からの引越しを車を用意して手伝うことで、関係を継続するきっかけとしました。

- 復興期にも継続して支援する必要のある人々との関係を維持できる仕組みを緊急救援時から作っておくと効果的です。



# その他の素材 研修ツール

- 目的: ボランティア派遣団体の研修担当者が、ジェンダー・多様性配慮を題材に研修を実施するため
- 内容: 問題提起をする絵と担当者向け解説書セット
- 進捗: 絵と解説書へのフィードバックを募集中。
- 予定: 担当者向け研修を実施



# アイデア集を使って研修の必修化を！

災害時に誰かが人知れず苦しむ環境は  
皆にとって居心地が悪いはず



災害被災者支援に関わる人「すべて」にとって  
ジェンダー・多様性配慮の研修は役立ちます！

災害時だけでなく、日常の私たちの社会を、  
声が出しやすく、暮らしやすくするための  
コツもわかります



Rise Together

東日本大震災女性支援ネットワーク